

集 詩

盤 水 聖

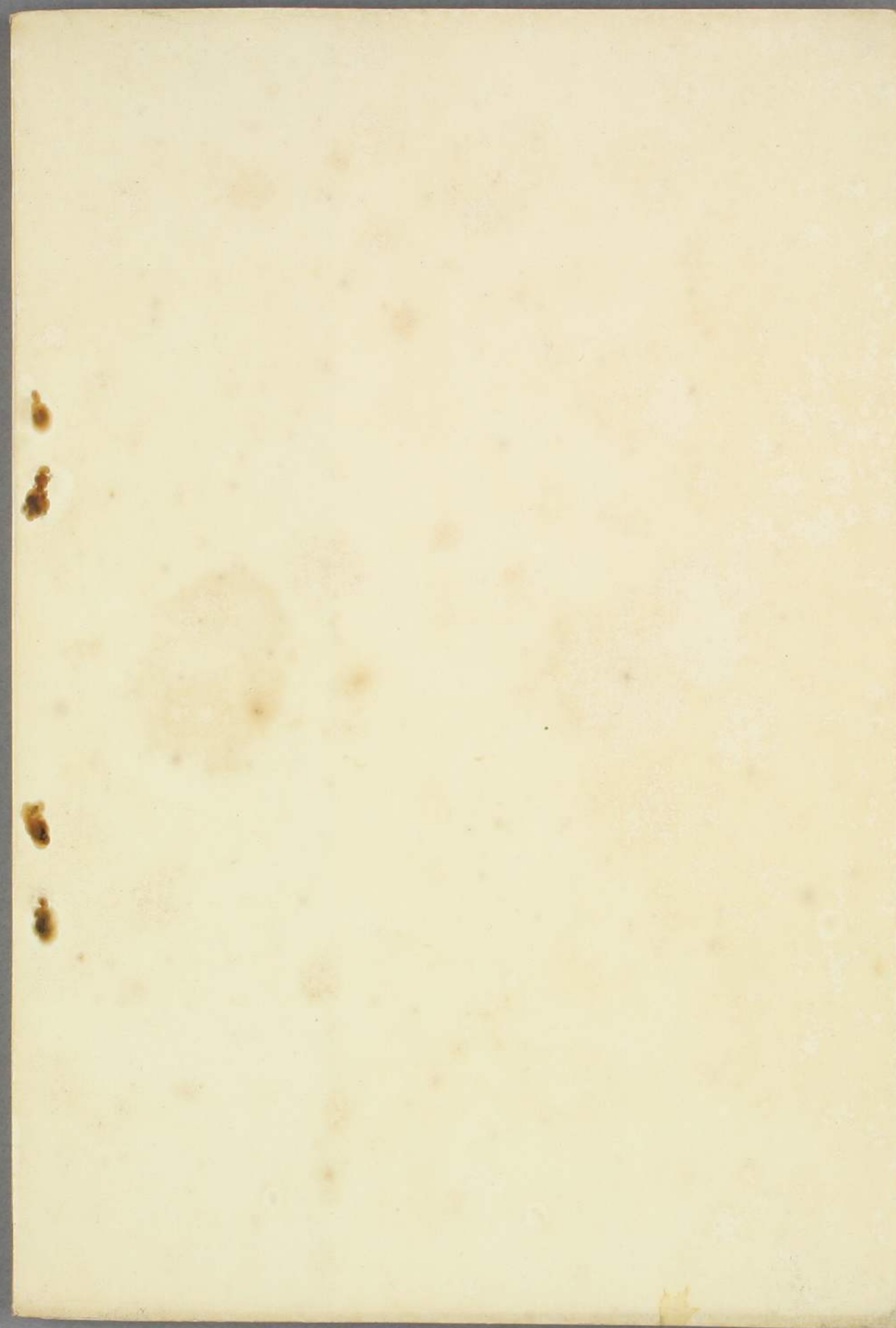
著 子 順 澤 米

聖

水

盤

米澤順子著



長谷川造様

著者

聖水盤

米澤順子著

聖
水
盤

われはきく 日輪の軋る音響を
われはみる 地氣の光彩を
さてわれは 何を知らむ――

聖水盤 目次

潜める夢

潜める夢	一
思 索	五
壁	七
疑惑の後	一〇
額	三
合言葉	一四

扉……………一七
 たはむれ心……………三三
 鳥は啼けり……………三四
 藥草園……………三七
 唄うたひ……………三〇
 鉦……………三四
 室内にて……………三六
 朝……………三九
 嗟 嘆……………四一

「彼の時」……………四四
 紫丁子……………四六
 掛毛氈……………四九
 悲……………五二
 さぼてん……………五四
 十月の涼廊……………五六
 哀愁……………五九
 扉のうちそと……………六一
 アキラサス……………六三

男……………七五

夜と薫香……………七六

山より……………七〇

路……………七三

音……………七六

種子……………七九

つゝしみの扉

鈴……………八三

黎明……………八六

つゝしみの扉……………八九

夜……………九二

我名を問ひそ……………九五

談笑……………九八

歡喜の浴槽……………一〇一

掌……………一〇四

烙印……………一〇七

思……………一〇九

鐘	110
生活	111
欲求	114
圓桂	117
未知の國へ	119
午後	121
創造	122
なべて聴し	124
蓄金香	125

秘薬	131
な暗き中に	134
砂金の眼 七章	136

装 幀 著 者

潜
め
る
夢

潜める夢

肉桂の一葉一葉に、
忍びつつ、ゆめみつつ、
けむり色せし黄昏の歩み寄るとき、
疲れたる月蝕色の月は、はや落ちかかり、
夢は、うす紫の玻璃戸を越えて、
ほの暗き聖水盤のかたかけに、

しろじろと身を潜む。

よろこびはしろがね色、

わびしさは枸櫞くわんの匂をして、

ほの暗き聖水盤の聖水を、

かすかにも揺りつつうながす――

或る女、

幻の如くよそほはざる右手を伸べて、

小さき黒耀石の盃を擧ぐれば、

音もなし……

憂愁うれひは陰影かげある臉の色、

はぢらひは蒼き夜霧の匂をして、

ほの暗き聖水盤のかたかげゆ、

ひそやかに波うちつつ、

つつましく時めく胸をめぐる――

夢は、

ほの暗き聖水盤のかたかげに、

しろじろと身を潜めつつ、

常に真紅の『創造』を生み、
常に金色の『永劫』を唱ふ。

大正三年二月

思索

あらしの云へる、

草も木も、

われにこそなびかめ。

えめらるど色のおほ空の下に、

白きたんほほが、

ひとつ咲けり。

とびらの云へる、

つつましきのつくの指を、
われのみぞ味ふ。

にび色の壁の下に、

無言のすとうぶが、

めらめらと燃えてあり。

大正三年二月

壁

壁に凭れば、

さてもあやしや。

かはたれの勤行こんぎょうに倦つかれたる、

尼僧の臉おんの如く、

手ずれたる皮表紙の小皺こずの如も、

古くして静なるもの、
やすやすと、
われに迫り來。

暗緑と深紅の、
エヂプト模様の机かけ――

壁に凭れば、
さてものろはしや。

左右にひろがれる
警者の耳の如く、
花形にちりばめたる、小匣の青貝の如も、
卑くして古きもの、
やすやすと
われをめぐる。

さなり、
まぼろしの壁はとき色。

疑惑の後

かかる時、
月光の中なる君が頭に、
オウロラのかかれるかと思ゆる、
奇しき氣高さよ。

そは、

たはむれの如く前齒の間に、

そと漂ふ、

茴香うまきの匂に似たる、

よき疑惑の後のひとときなり。

蒼白き一すぢ路よ、

やはらかき、

されど時々は足にまつはる敷物を、

月光の中より取りのぞきそ。

大正三年二月

額

解けかかりたる髪にこそ、
惱ましきまでの美しくしさはあれ。

あはれ、
病める薔薇の色、
つつましき君が額をかすめたり。

われものみなを愛せんが爲めに、
休む事なく、
君が額をみつめてあり。

大正三年二月

合言葉

淋しけれども快き、
忘却のただ中に、
燃え出でたる
白蠟びやくろうの
一列。
ひたすらに、

玉蟲色の顛かぶに沈む肉の中より、
ひき抜かれ、
さて
ため息つきし物の刃はのごと、
心昂かぶりて蒼み、
ほろろとおぼめく
ほのほの一列。
ひそやかなれども誤なく、
ほろろとおぼめく白蠟の、

火^はさきをわたる
合ことば。

大正三年六月

扉

かれらまづ、
扉の前に立ちたり。

羚羊皮の手套をはめたる男
出でて敲けり。
——扉は動かず

——扉は動かさず

羚羊皮の手套をはめたる男
疲れはてたり。

されどなほ、ははこ草は、
事もなく野に咲けり。

紅玉の珥みみかざりをつけたる女
出でて打てり。

——扉は揺がさず

——扉は揺がさず

紅玉の珥をつけたる女
倒れたり。

されどなほ、あかしやの葉は、
事もなく風にそよげり。

燈したる瑠璃色の蠟燭をかざせる男と、
驕れる虹色の面紗をかけたる女と、
出でて押せり。

――扉は開かず

――扉は開かず

男は燈したる瑠璃色の蠟燭を、

女は驕れる虹色の面紗を、

投げ捨てて

蒼ざめ泣けり。

されどなほ假面^{めん}づくりは、

事もなく

おどけたる假面をつくれり。

扉はただ昏睡してあり。

大正三年二月

たはむれ心

わけもなき平和の中に、
塗り込められたる肉色大理石のストウザ、
軽やかに、
赤熱の焔をあげて燃ゆる――。
やがて其目のたはむれ心、
そことなく握れる紙きれを、

ふと投げ入るれば、
寶石の如く
細かくして色深く輝ける文字は『幻影』

大正三年二月

鳥は啼けり

覆輪フクリンの、

紫丁子の、

病めるかをり、

その中に、

鳥は啼けり。

うすら苦ウツラクき、
群青色グンシヨウの、
戀コイどころ、

その中に、

鳥は啼けり。

よき髪を洩れて、
舞踏する、

日の七いろ、

その中に、

鳥は啼けり、
輝やかに。

大正三年三月

薬草園

理由なく壁にかかれる紐の、
ながながと陰影多き色かな。

今日もまた、

むれかへる

薬草の呼吸を思へば。

ぬれぬれてものうき大氣、
ほそ雨の中にもつれまどふ。

髪は雲のごと、

その下ゆ、

わづかにましるく

もの惜みせる額。

ほほゑめば淡々と、

たまゆらに思ひも出でつ。

薬草の花どこに、

置きわすれたる

黒き手袋。

大正三年三月

唄うたひ

夜は、

かなしき唄うたひ、

月光に、

蒼ざめ、ふるへ、すゝりなきつつ、
窓ごとに、

さまよひありく。

さて、

『胸の一部』を彫る鑿の、

さきこそ、

くつろかに休らへ。

玫瑰はまなすの香かきりをふくみ、

滑らかに鑿の刃をすべる、

夜の唄の、

かくし言葉を知れりや。

ものみなよ、

よき唄を聞けかし

今ぞ。

大正三年三月

卸

よき惑溺の底には、

なめらかにして露を含める、

匂高き苔、

はるかにつづく。

其上を、

乳色の素足眩ゆきまで輝きて、
あわただしく、
はた音もなく、
揺らぎにゆらぐ狂喜の舞踏者の方舞。
彼等の肩には、
澄みて動かざる火の如き、
大いなる釦をつけたり。

何ともしらぬ裸形のもの、
總すくの思慮のいただきに立ちて、

冷かに見下ろせり。

あな、
足下より飛び立てる金色の羽蟲の群、
羊皮紙に書ける文字の如、
靡爛せる微風の中に、
現うなくゆがめる輪を描く。

何ともしも知らぬ裸形のもの、
かすかに眞白くほほゑめり。

大正三年二月

室内にて

窓枠の中なる大空、

いと

にはやかに輝けるかな。

擦れ合ふ、

冷たき絹の音を先だてて、

おそれつつ待ちわぶるもの、
今われに來れり。

「汝が腫

うつろの如く

ただ開けり」と。

あな大空の、
にはやかに輝けるかな。

人はその下に

鑿をふるひ、
草を噛み、
はた、思ひがけなき夢をむすぶ。

大正三年三月

朝

しんしんと波打ちて、
つめたさは
小指のさきよりぞ浸み入る、
黎明のベッドに充てる、
半流動體のなまぬるさ。

またも、

窓硝子の中なる小さき泡、

おびえつつ、

日のはじめを歡よろこべり。

奇しきかなこの窓の外とに、

みづからは白光る嚴肅いかめしさをもて

太陽を拜める人あり。

大正三年二月

嗟嘆

小さきしろがねの鈴、

なぐさめがたき悲愁に

さしぐみ鳴れり。

夏なれば水蠟樹の花、

こまごまと咲く。

わが心しづかに、
されど眞晝の太陽の投ぐる聲に、
たゆたひ
熔けなやむ。

夏なれば水蠟樹の花、
かすかにあまし。

みつむればみつむるままに、
影多き睫まぶたの色かな。
小さきしろがねの鈴、

なぐさめがたき悲愁に
いよよ身を揺る。

水蠟樹の花、枝に咲きみち、
日と夜とを
なげさくらす。

大正三年七月

『彼の時』

かすかにも、

聲は云ひぬ『彼の時』と。

さなり『彼の時』

體えてうするへる日光は、

われらが半開の臉の上に休らひ、

草の中に倒れたる墓石は、

われらを見て

ものうげに呼吸づけり。

うねりたる野の路の如く、

顔なに『彼の時』の横はれる間は

われら常に、

おろかなる平和の中にあらん事の

いとほしさよ。

大正三年二月

紫丁子

ひとつひとつに、
こぼれても見よ、
さかしげに匂へる
紫丁子むらさきぢょうじ

うつつなき

紗綾形マヤの小裂こに、
冷たくも揺り眠る黄昏たそがの微光。

かくて、
來るべき夜は酔く甘き、
物まち心に充たされむ。

さて物音は
毛ばだてる、
わがほけつとの

底ふかく――

こぼれてもみよ、

たそがれの

紫丁子。

大正三年三月

掛毛氈

青銅の甕を抱ける若者、

愁はしげに入り來れる時、

まぼろし色の壁の上なる、

掛毛氈の縁模様、

ふと、

云ひ知れぬ快さをもて

深紅に搖ぎ笑ひぬ。

靜なるすぎこしの中に、
飛び去りしすべてのこと、
むら立ちて、
古りにし甕のおもてに浮べるを、
たゞみつめ、みつむる、
蒼白き額に垂れかかれる
捲毛のつやのぬれいろ。

ひそやかに搖れ戦ぐ、
掛毛氈の中の裸形の女、
びろろの黒さをもてる、
毛並よき馬に乗れり。

大正三年二月

悲

かねしみに擦りへらされたる女、
ただ歩めり、
いと暗き沼のほとりを。

ほの白き躡地をはなれ、
また新らしき土を踏む、

かねしみはなほその如、
追ひすがり來。

女、

かねしみに疲れ果てて、

色なきみづくさの中に足を浸せり。

さて、重き沼氣は、

胸と

足あとにただよふ。

さぼてん

ふと見上げたる、
爬蟲類のまなざしに似たり、
ただひとりぬれて立てる、
小鉢のさぼてん。

きりりころと、

樞戸は

開くらし。

さみだるれど、なほ暮れがてに、
日は顛へつつ氣流に溶くる、
ただひとり、
あやしげに立てる
小鉢のさぼてん。

大正三年三月

十月の涼廊

熟して揺るる 茴香ウメキョウのほのあまき、
涼廊ゾウラウの圓卓に置かれたるペパーミントの

すずしき青色、

われら、ほがらかに十月の日光に浴しつつ、
なほ、何としもなき空虚を思ふ、
物わすれせしころ。

ともすれば額にかかる後れ毛を、
匂みちたる言の葉の合間合間にかきあぐる、

—— 黒き小櫛 ——

そは、
ふと若き女王を想はする君が癖なり。
ここに女ふたり、
十月の太陽をあふぎてあり。

味ふかき微風そよかぜ、

大理石の圓卓に忍び寄れば、
ペバアミントの透きとほれる青きかをり
われらが肉聲に混りて、見えざる波紋を漂はせ、
夢をふくめる十月の大氣、
いよよ身のまはりに重りゆく。

かかるとき、
凭るによき涼廊の圓ばしら、
——あな、奇しきその肌ざはり。

大正三年十月

哀愁

人びと、
みづからの手に墓壁穴を掘り、
深きをのぞみてやまず。

われひとり
柔かき大地の上に、

手をつがね、
たたづみつくす。

わがうれひは、
いと小さき晶玉のいろ、
わがかなしみは、
かがやける螺旋のかたち。

大正三年十月

扉のうちそと

とびらの外には、
うす紫のあけぼのあり。

とびらの内には、
灰色のたそがれあり。

ああ、
ふたつながらに
まことの『今』なるかな。

大正三年二月

アキラサス

銀の蝶つがひ、
いとほしき銀の蝶つがひ、
びらうどの
小匣に眠れり。

深紅と暗緑のアキラサス――

淡黄と銀のアキランサス――
日光を吸ひ、
午前十時の物音を吸ふ。

いつの日か踏切りの胸壁に凭りて立てりし、
金髪少女の乗馬^{マガレット}髪を、
思ふともなく、
幾度も思ひ出づる日かな。

大正三年十月

男

匂なき秋雨^{あきさめ}に、
粗く臭気あるけむりは纏^{まと}はり淀む。
色赭^{あか}き男その上に乗り、
傍人を制しつつ
大地にうめくロウドロウラア。

襲はるるがままの疲勞つらに身を任せつつ、
人と人とはゆきかひ、
物と物とはすれあふ。

秋雨のゆふべ、
すべてものうげにして小暗き騒音の中に、
ただ一人色赭あかき男、
大地にうめくロウドロウラアの上に、
兩脚に力漲り丈高く立ちつつ、
傍人を制す――。

大正三年十月

夜と薰香

夜ごと
うす青き玻璃戸を越えて、
音もなく、
わがソファの片隅に来るものあり。
輝けども、
饒舌なれども――

深き紫銅の甕の口より、
浅香の氣おもおもと立ち、
ものみな静かに壓さるれば、
色沈みて
かくれたる吐息をなす。

わが心ややに蒼ざめ、
血に似たる
ほどろを染め出せば、

輝けるものいよよ饒舌に、
聲たかく
おどけたる小唄をうたふ。

大正三年十月

山より

日ざし疲れ傾き、

ぎやまんの切籠きこに、

よわよわと色づきなづむ。

山なれば、

秋なれば、

水は走りて止まず、

その飛沫つよの面おもての、

ひとつひとつのいとほしき丸みに、

日ざし傾き疲れ、

せめての刹那を

休らひなづむ。

雁皮の花、色あまく咲けり、

その枝の切口に、

ひたすら寄りすがる小さき泡、

小さき泡よ——
ぎやまんの切籠の中に、
たはむれあそぶ。

日ざし疲れ傾き、

よわよわと、

万象もろみの上に色づきやすらふ。

秋なれば、

山なれば、

大正三年九月

路

彼等

瞽者こしやの如く、

はじめなく終なき、

ま白く直なる路を、

ひたすら行けり。

ただならぬ物語あまた秘めたる、
たくましき腕をもてる若者も、
さまざまの夢を含める寶玉を、
重きまで衣に縫ひ込めし女も、
人みな一途に、
見えざる果を
追ひて止まず。

草の葉は白く粉ぶき、
黄金の向日葵のみ。

倦む事なく
大空のひろきを讀ふ。

大正三年十月

音

動かしし事なき長椅子の足の、
されば油も注がぬ、
銀の小車のつけ根に、
名を知らぬもの
忍びて蝕めり。

人よ、
きかずや。

ひそやかに、されど力漲れる、

音は

燻色の跡を引きて、

匂ふばかりに跡を引きて――

人よ、

さなをののきそ。

夜深ければただひとり、
光なる、腫なる、
色蠟燭の灯はかげも、
ほほと
おぼめく。

人よ、
鍵穴をふさげよ。

大正三年三月

種子

蓋のふち、
かすかに觸れ合ひて鳴れば、
琥珀いろのふるへ、
歡喜に充てるを指のさきより、
われらが胸にかよふ。

玉羊齒の葉、

あたたかき吐息に酔ひて、
うつつなく揺り眠る。

われ談笑の中にありて、
ふと、

ひとつひとつにうす青き芽を生む
地上の種子をおもふ。

大正三年十月

つつしみの扉

鈴

柘榴の實、熟して地に落ち、
たわめりし枝もとに復す。
人しれず——

放たれたるエリエルのごと、
かるやかに

大氣に遊ぶわが心。

藥草のかをり、

ほのかに浸みたる白き寛衣、

——常なれば、思ひも止めね——

何ものかその内より、

白日に反抗あきらひうたふ

フオルテイシモ——

あな、

めづらかにひびき鳴れり、
いつの日か彼の枝に、
かけ置きしがねの鈴。
芽を含む種子のごと、
いとまるきしがねの鈴。

大正六年一月

黎明

わが衣は、
しろかね色。
かはたれの街上に、
からころと、
登音のぼりねすなり。

無知なれば、
何をかも見む。
たゞふさはしき、
わが衣は、
しろかね色。

いつしかに
肩をすべりし碧き上着、
今はそも、
思ひもやらず。

わが衣は、
しろかね色。

大正六年一月

つゝしみの扉

あはれつゝしみの扉、
押し黙り、
おもおもと立てるかな。

その面を、日は斜に、
潤ほへる氣流

そと、
觸れゆく。

あはれつゝしみの扉、
裏と表に、

同じ繪模様あれど――

ふと、

ひそやかに物惜みしつゝ
忍びつゝ、

われらの呼吸は通ふ、
いつとしもなく見出しし、
小さき鍵穴。

つゝしみの扉、
おもおもと押し黙り立てれど、
その中にいのちあり
あはれ少さき鍵穴。

大正六年二月

夜

すずしき、
樂の中なるタンポオリン。
をりをりに、
奇しき律呂を編みゆく。
なめらかに漂ひ渦まく、

髪油と呼吸の芳香。
ほのかにも脈打つ人々の頬にまつはる。
暗きもの、明るきもの、
甘きと苦きとの外なる、
樂の中なるタンポオリン。
其のおのおの
聲かれて小さき音のぬし、
一齊に、
奇しきわらひに笑ふ。

しかも、
すずしさを亂さぬ律呂の流れ。

忍びやかに擦れ合ふ、匂浸みたる肌と、
輝く七いろのきぬ、
はた、寶玉の胸かざり、
その身動きの音——ささやかに——
人々の胸にかたちなき幻を強ふ。

大正六年二月

我名を問ひそ

我名を問ひそ、
偉なるもの、
われはただ、
よもすがら頸垂れ、
いと重き沈黙に向ひ
聲もなく語らふもの。

我名を問ひそ、
輝けるもの、
われはただ
とはにこの如腕を組み、
わが身に萌えし
いとほしき双葉の草を、
わが血もて育み守りてあらむ。
きけよ萬象、

今こそ、
いと重き沈黙の中に
一こゑ應ずるものあり。

大正六年一月

談笑

何をかうながし燃ゆる、
心なき談笑の中に、
ただ揺らぐ燈火のいろ。

張り充てる水盤の水の碧み、
渦まく聲と煉香のけむりに疲れ、

ややにぬるみ、
滅道の波紋を描く。

されどなほ、
飽く事なく燈火の光にひたり、
うつつなく
手まさぐるつぶらなる種子^{たね}。
ああ、
いづこにか思ひを寄せむ、
手まさぐるつぶらなる種子。

何ものか、その中に潜める、
つちかはれ、
はためぐみ、
やがて華はなくふたつの心。

大正六年一月

歡喜の浴槽

偉たかなるものの頂いた點てんにありて、
陽ひひときは輝けるとき、
晶玉のごと透きとほれる、
歡喜よろこびの浴槽ゆたかに浸れば、
なめらかに、
ましるに、

心ゆくまで弛びし現なき肌の色。

尊きものの頂點に立ちて、

犬氣常なく香れる日、

淡き薔薇の色せる、

歡喜のうま酒舉ぐれば、

淨玻璃の盞そと觸れたる音波の末に、

あやしくもつづき震ふ心のしらべ。

大正六年二月

掌

執拗の玉かざり、

わが胸に淨々と揺るれば、

ひねもす休む事なき、

そぞろありきの後園の花、

一齊に、

芳香と光輝との渦もて迎ふれど――

わが胸かざり、
なほ
飽く事なく顫へ鳴る――。

惑溺の底には、
ほの苦き焦燥あり、
よもすがら思ひ疲れ、
凭りつくすよろこびの椅子、
ああ、それだに、
故しらぬ哀愁のカヴーもて覆はれたるを――

ああ、
わが永遠の生命の鍵を握れる、
偉なる
彼のましろき掌たねいろ

大正六年二月

烙印

みよ細雨の中なる木の芽、
春なれば。
ほがらかに句をふくめり。
胸
ややに和み、
さて

ややにをののく――

ああその日、
ふと
かひまみし生命の奥底。
さ蒼き驚愕と、
その上に跡つけられたる
真紅の烙印。

思

夜ふかければ、
燈火も

あるかなきかにまどろむ。

うす紫の面紗のごと、

まどはしく、

視線をさへぎる思。

現なく垂れし窓掛、

そよと揺れしよ。

ま白き寛衣あらはに、

夜をこめて

さまよひ歩く夢遊病者。

大正六年三月

極

なつかしき心の前に、
われあり。

聖なる何ものか、
香かほ浸ひみたる朝の着衣。

地上をおほへるは、
ただひといろの浅みどり。

大正六年四月

生活

歩め、
果しなき地上を。
紅き眩暈とおのづからなる怠惰、
ああ、
その蠢動の中より
熱砂の吐息空をおほへり。

我等、
足裏にそを踏みしめつゝ、
飽く事なし——
ああ
匂やかに潤ほへる休憩時の無音の挿話。
またも革袋の美酒、
疾きあゆみに
はたはたと揺れ鳴れり。

まぼろしならぬオアシス、
さなり
地平線の彼方まで――

大正六年七月

欲求

夜をひと夜、
開け放たれたる窓の、
うつろなるそのおもひ。
知り得ざる
焦燥の笑。

水底の魚よ、
汝が求むるは、
この窓のうつろなる、
小さき女のそのおもひ。
小さき女の
知り得ざる焦燥の笑。

大正六年六月

圓柱

薰香を捧げし聖童、
あかつきなれど、
快きめざめに心和み、
静なる素足の踵、
初夏のさうびの如も、
はた

あるとしもなく匂ひ出でたる、
赫かへきしきそのときいろ。

すず懸の林、
流れ來べき勤行ごんぎょうの銀色の音波を夢み、
かけ連ねたる絹のごと、
渴き戦げり。

日かげなだらに走り入れば、
立ち並びもたびもたしつづ、

一せいに、

さも色めく圓ばしら。
たまゆらに浮ぶすぎこしのごと、
伽藍に並ぶ圓ばしら。

大正七年二月

未知の國へ

憂は燃ゆる燐の色、
よろこびは日の金色、

われ晩秋の野薔薇のごと、
病み、疲れ、たわめるとき、
心の柵を踏み越えて、

さやめき來りし無音の言葉、
その聲をこそ――

大氣ややに潤ほへば、
静かなるわが額、
花辨のごと紅くれないに、
絶えざるキスのいらだたしき舞踏まわたり場。
眞白き腕は、
勇ましき歩みを促し、

日は金色に
未知の國へ――

大正七年二月

午後

ふらすこに、
水は充ち、
夕陽ゆららぐ。
人、
無心に歩めり。

椅子の、
はた
さまざまの金具の銀色、
きららかに――

人、

無心に歩みつづく。

ゆき、もどり、

室内を

人は歩めり。

うすみどり

街路樹の廣葉、

窓ゆ、

さやぎて頬にかげらふ。

大正六年七月

創造

うかがひ寄る無形の緊縛、
なめらかに、
いとも平らけさししむらに
あゝ
花びら色の快感。

眞珠なす油のしたたり、
我身常なき香に充ち、
そぞろ天地を戀ふ、
あゝ
尊きものを生むころ。

大正六年七月

なべて恥し

苦に浸むほそ雨、
まどはしく目路にちららぐ思、
なべて恥し
この思、
冷たきは爪みがきの銀の小鏡。

大正八年五月

鬱金香

しづけき燦色の夜、
その息吹は清新に、
絶えざる芳香と黄金の魔睡薬、
いつよりか、
われそのふところやすに憩らへる。

しづけき燻色の夜、
醒むる時なき鬱金香の
汗ばめる夢見心。
そは南國の王女のよそほひ、
抱くによき素肌のうなじに、
心昂れる上搏に、
ひしめきまつはる金環、
ああ堪へがたき匂こぼるる。
しづけき燻色の夜、

かつて我前を横切りしもろもろの物象、
いま
驕りたる玉の色に輝きて歸り來。

大正七年四月

秘 薬

小 さ き 褐 色 曇 に、
色 和 め る 陽 光 を 見 よ。

晩 夏、

そ の 午 後 の も の う き ひ と 時、
し か も な ほ、
何 と し も な く 足 ら ざ る お も ひ。

街 路 の 木 の 葉、
日 を ひ と 日 戦 ぎ 疲 れ た り。
萬 有 の 外 な る わ れ ら の 國 を、
何 も の ぞ
か ひ ま 見 る。

く ま な く、
身 内 を め ぐ る 秘 薬 の に ほ ひ、
さ は ま り も あ ら ず、

ひとむきに、
われを驅るみづからの力。

いづこにか醸さるる、
いとも愛でたき秘薬。

大正六年八月

を暗き中に

を暗き中に、
ちろとうるみ輝くは何ぞ、
心うれしむ萬象その中に躍り生く、
君が無名指に、
一滴、水の色せし晶玉。

大正八年六月

砂金の眠七章

I

ある時は瞽^{めくら}者の如く、
ましぐらに
走りしか。
やすらかに

砂金は眠れり、
つつましき、
夢の淡^{あは}色^{いろ}。

II

あるがままに、
ただ挿したるビイカアの花。
血のほどろさながらに、
なまなまし

グ
ラ
ジ
オ
ラ
ス。

III

ひ
か
り、
髪
を
洩
れ
て、
か
な
た
な
る
よ
き
顔
に
遊
ぶ。

今
日
も
ひ
と
日、

酔
ひ

ほ
ほ
ろ
ろ
み
て
過
ぎ
し
か
な。

IV

ま
ど
ろ
め
ば、

あ
な

我
子
生
れ
し
よ。

草

大
地
を
お
ほ
ひ
て、

か
す
か
に
も

匂
に
み
て
り。

V

うたはまし

鳥よ魚よ、

はた、

もろもろの心明るきもの。

路、

一すぢに

坦々として白し。

VI

彼の竝樹、

炎熱の中を、

いづこにか果つる。

生けるものこそ、その下に、

さまよひ

をどらめ。

VII

いつの日か、

大空に描きたる

輝きていともさかしき輪環、

ふと、

足ふみ入れしものあり。

ああ、

砂金の眠めざめたり、

とはに――。

大正六年七月

— 聖水盤 —

大正八年十一月十三日印刷
大正八年十一月十六日發行

定價八十錢

著者	米澤順子
印刷所	東京市芝區愛宕町三丁目 東洋印刷株式會社
印刷人	東京市芝區愛宕町三丁目 笠間音次
發賣所	東京市神田區表神保町 東京堂

